

「時を思う」

コヘレトの言葉 3 章 1～11 節

聖学院院長・キリスト教センター所長 山口 博

本日与えられました聖句は多くのキリスト者が愛読する箇所であるばかりでなく、大学生にとりましても興味深い内容ではないでしょうか。

コヘレトの言葉 3 章 1 節「何事にも時があり 天の下の出来事にはすべて定められた時がある」と綴られています。わたくしどもにとって大事な「時」とはどのようにして分かるのでしょうか。

綿密な計算をすれば分かるものでもありません。感に頼るのでしょうか。それとも運命として捉えるのでしょうか。聖書を読むとお分かりのように「時」は神様がお定めになり、神様がお与えになる「時」であることが分かります。マルコによる福音書の 1 章 14 節・15 節にこのことがよく示されています。マルコによる福音書 1 章 14 節・15 節【ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。】と記されています。これは人間の考えや努力を捨てたように見えますが、そうではなくわれわれの熱心な願いと神様のお決めになることはいつでも結びついています。「時は満ち」と書かれています。「時」は一方的に突然来るものではありません。ある人は「聖書とは人間と神様との交渉の歴史が書かれている」と言いました。人間が神様に背き、それを神様がどのように扱われたかが記されている。本当の「時」が来るまで神の数々の恵みの手立てがあった。人間は罪人ですから当然曲折もあったのです。今こそ救いの時だと確信するまで神様がどんなに顧みてくださったかが聖書に記されています。そして、初めから約束されたその「時」を来らせられたと聖書は語るのです。このことは主イエスが来られたことのうち一番よく示されています。このことをルカによる福音書 4 章 21 節では主イエスがイザヤ書を引用いたしまして「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話し始められたのです。つまり「時は満ちた」というかわりにかねがね約束されていたことが実現したのだということです。

神様の御支配がわれわれの生活の中に及んできていることが分かった時に初めて本当の「時」が分かると聖書は告げるのです。そして、生き甲斐を感じ、生きることのできる「時」となるのです。人の決めた「時」ではなく神様が長い間の恵みの準備の果てに与えられた「時」です。それを信じてきた時に朝も晩も、夏も冬もあらゆる「時」はわれわれにとって生き甲斐のある「時」になるのです。

それが分かると後悔することがなくなると思います。悔い改めは必要です。後悔をして自分の人生を嘆くことはなくなります。なぜならわれわれが今生きているこの時は神様がお定めになった「時」であり、救いの約束を持ってわたくしどもを生かそうとしてお決めになった「時」であることを知ることができるからです。イエス・キリストを信じるときにどの時間もどの「時」もその「時」になることを確信することができるからです。

2024 年 1 月 16 日 聖学院大学全学礼拝